

## No.102 会社訪問

## 日本理化学器械株式会社

代表取締役 谷尾 和彦 氏



会社プロフィール

代表者：代表取締役 谷尾 和彦

所在地：112-0004 東京都文京区後楽1-7-12

TEL：03-3815-1611 FAX：03-3815-1641

創業：1922年10月・設立：1958年3月

資本金：2,400万円

営業所：札幌営業所

研究センター：文京区西片

事業内容：理化学器械の製造・販売

URL：<http://www.nrk.jp>

聞き手：山口美奈子（広報委員） 藏満邦弘（専務理事） 取材・撮影・編集：クリエイティブ・レイ(株)

大正・昭和・平成と日本の科学技術の発展を支え  
ともに歩んできた“老舗企業”

— 御社の創業は大正11年（1922年）と伺っていますが、創業の経緯や当時の様子など、ご存知の範囲でお聞かせいただけますでしょうか。

当社は、私の父である谷尾八百吉が創業した会社です。父は現在の福島県郡山の出身で、12歳のときに上京。品川にあった理化学医療用ガラス器製造所で働き始めました。

そして大正11年（1922年）に独立し、東京都文京区湯島において、理化医療用硝子細工所として谷尾製作所を創業しました。

— その後の主な歩みもご紹介いただけますでしょうか。

昭和12年になると、東京都本郷区（現文京区）本郷の1丁目1番地1号に製造部および製品開発工場を移転しています。現在、この場所には御茶ノ水の順天堂大学の附属病院が建っていますが、本郷1-1-1ここが、私が生まれ育った場所ということになります。

戦時中の話ですが、軍の通信手段として使われていた軍用鳩（伝書鳩）を飼育し、商売していたことも

ありました。

本業とは異なる事業ですが、父が買い与えてくれた2羽の血統書付伝書鳩を、私が交配を重ねて200羽まで増やしました。その優秀な伝書鳩を1羽10円50銭の高値で取引、10代にしてかなりの売上を得た思い出があります。携帯電話やメールを使われている皆さんには想像もできないことでしょうね。（笑）

昭和17年になると、農商務省の滝野川農事試験場（現東京都北区西ヶ原）をはじめとして、全国の農事試験場の特殊分析用硝子器具などの製造と販売を行うようになりました。

その翌年に、父は東京帝国大学農学部の実験研究室に戦時技術員として就任しました。そのような関係から、戦前は東大農学部の地下室に当社の硝子工場を設けて、理化学製品を作っていました。

昭和19年には、ヤマト科学、三都製作所、そして谷尾製作所の3社が提携し、陸海軍の軍事指定工場となりました。そのとき、谷尾製作所は第一工場に指定されていたということです。

しかし、昭和20年3月10日の東京大空襲によって、

谷尾製作所は焼失。これまで築いたすべてを一夜にして失ってしまいました。それは私が14歳のときでした。

— 大空襲でご家族は無事だったのですか。その後、どのようにして事業を再建されたのでしょうか。

空襲によって両親とは離ればなれになり、飲まず食わずで三日間路頭に迷いましたが、奇跡的に家族と再会できました。東京ですべてを失った父が汽車の切符を持ってきて、着の身着のまま、北海道稚内の母方の親戚を頼って疎開することになったのです。

戦争が終わり昭和21年(1946年)4月、北海道では東京大学名誉教授の三井進午氏の推薦や北海道大学名誉教授の石塚喜明氏の招きにより、父は北海道大学農学部で硝子加工室を開設し、嘱託として勤務することになりました。その後、北海道大学に33年間勤務し、昭和54年(1979年)に退官しました。

— お父さまの谷尾八百吉氏は、硝子加工に優れた技術をお持ちだったということですね。



創業者の谷尾八百吉氏

そうですね。父はとも手先が器用で、真空管などの硝子細工を作るのが得意でした。戦前に柴田弘氏などと真空管ラジオを製造していたこともありました。当時は、ラジオの電波がよく入ると、竹竿に銅線を配線した大きなアンテナがあったことを今でも懐かしく覚えています。

— 谷尾社長ご自身のお話も伺いたいのですが、谷尾社長は北海道に移られてから、どのようにして事業を始められたのでしょうか。

私は、昭和21年(1946年)15歳で株式会社北海道興農公社、のちの雪印乳業株式会社の製薬部研究室に入社しました。そこでは細菌学を教わり、理化学

器械や器具などについても学びました。

その3年後、私が19歳のときに起業、札幌市で「日本理化学器械製作所」を開設しました。そして、昭和33年(1958年)3月31日に組織を「日本理化学器械株式会社」と改めました。ちなみに、この年は東京タワーができた年でもあります。

— 昭和40年に北海道から東京へ移られたとのことですが、どのようなことがあったのでしょうか。

北海道では3歳年上の兄が同じ理化学機器の事業をしており、互いに競合してしまうのも良くないと思い、昭和40年(1965年)に毛布1枚だけ持って上京、マンションの1室を借りて東京営業所を開設しました。そのときは本社を札幌としていたのですが、やがて、本社を東京に、営業所を札幌に変更しました。

— 東京での仕事が軌道に乗るまで、どのくらいの年月がかかったのでしょうか。

信頼を得て事業が安定するまで4年ぐらいかかったと思います。事業が軌道に乗ったところで、札幌で販売の手助けをしてくれていた妻を東京に呼び寄せました。それからは、私自身があちこち営業に回れるようになり本社事業が好転しました。

徐々に東京都の衛生研究所や病院などに製品が売れるようになり、水産試験場との取り引きもできるようになりました。北海道でお世話になっていた方が、東京の水産試験場の場長になっていたという偶然も重なり、人との出会いから仕事のご縁をいただけることを心に強く感じました。

— 御社の主力製品を教えてくださいませんか。

大阪万博が開催された昭和45年(1970年)には、NRK透明すり合わせガラス製品の販売を開始しました。この製品はノングリースで使用できるので大変好評を博し、全国各地にNRK販売ネットワークが広がっていきました。

このタイプの製品は以前からありましたが、それに私のアイデアを加え、硝子の内側と外側を透明すり合わせにして、密封できるようにしました。この製品



NRKノングリースガラス機器製品



NRKユニチューブ

はガスクロマトグラフィーに使われたため、ガスクロカプセルとも呼ばれました。

また、理化学ガラス製品の他に、多目的に使用できる「NRK ユニチューブ」があります。昭和40年(1965年)優れた新素材との出会いがあり、その素材を技術改良することよりユニチューブの開発に到りました。このチューブは特に耐薬品性・耐油性・耐熱性・耐圧性に優れており、すでに50年近くに渡り、多様なニーズにお応えしています。

— 製品開発にあたり、谷尾社長の理念のようなものはございますか。

私の発想の原点は父親です。子煩悩で優しい父は「どうせ作るなら、世界一のものを作れ!」と言っていました。その父のうしろ姿をみて育った私は、すでに愛用されている理化学製品にアイデアを加え、より使いやすく優れたものに技術改良したNRKオリジナル製品をつくり上げました。

私がアイデアを出し、機器づくりに長けた器用な社員らに試作・製作してもらったわけですが、開発から製品のカatalogづくりまで、私ができることは何でもやってきました。

例えば、トーマス・エジソンは発明王として有名ですが、さまざまなものを作ることができたのは、その周りにいたスタッフやブレンもよかったのだと思います。だからこそ、世界最大のゼネラル・エレクトリック・カンパニーができたのではないのでしょうか。

要するに、大切なのは種の撒き方です。撒いた種は土壌がよければ、やがて実って自分に返ってくるものです。「これだ!」と思ったアイデアを信頼する人とともに実現させるのです。反対に、撒き方が悪いと花も咲かず戻ってこないわけです。人生にはそういうときもあります。

それと、母親がよく「鶉の真似をするカラスはダメ」と言っていました。ものまねでは新鮮味が欠け、人の心に響かず、世の中には広まっていきません。私は両親から、知恵を出し努力することを教えられました。

— 御社の経営方針をお聞かせいただけますか。

当社では経営方針として、次のような会社綱領を定めています。それは「社員の親睦と職業倫理の高揚に努め、会社の繁栄と社会的地位の向上を図り、学術・産業の進歩発展に貢献する」というものです。

どれだけ社員と家族を大切にできるか、経営者として私はそれを大事にしたいと思っています。



谷尾社長直筆の経営哲学



— 谷尾社長の経営哲学をお聞かせいただけますか。

これまでの人生を振り返ると、たくさんのお会いがありました。それらの出会いによって豊かな人生とビジネスが持たされたと確信します。

「一期一会」すべての出会いが貴重な縁と考えて大切にしてきたからこそ、今の私があるわけです。

人は自分の欲を抑え、人のために働く。それが結局、自分自身も、周囲の人間も幸せにしていくのだと思います。

また、幼い頃から働く両親の背中を見て学んだことがたくさんあります。それは「初志貫徹」「努力実行」することの大切さです。

例えば、アイデアがひらめいても、人に語るだけで、なかなか実行しない人がいます。それではダメで、何かこれだと思えるものができたなら、それを実行し、成功するまで続けてみる。それに加え、人との出会いを大切にしていけば、人生は開けてくるものです。

— 今後の目標や実現したい夢などがございましたら、お聞かせください。

たまたま、長野県軽井沢に土地を所有しており、ここに理化学機器の遺産を集め、理化学機器の歴史や業績が分かるような記念館を作りたいというのが、私の夢です。

これまで日本人のノーベル賞受賞者が20名以上出ていますが、その栄光を陰で支えてきた理化学機器はほとんど残っていません。それではちょっと寂しいように思います。

また、理化学機器を扱っていた私の父は、東京大学の農学部や北海道大学の農学部で育てられ支えられてきました。東大農学部などは日本の医科や理化学機器の歴史そのものでもあります。それらへの恩返しの意味も込めて、記念館をつくり、歴史的に価値のある理化学機器などを後世へ残していきたいと考えています。

— 最後になりますが、谷尾社長の趣味と、休日をどう過ごされているのかを、お聞かせいただけますでしょうか。

戦時中の伝書鳩の飼育に始まり、これまでいろいろな趣味に手を出し、楽しんできました。

例えば、北海道では狩猟（鉄砲）、妻に教わったボウリング、先輩や友人との麻雀、車、お酒やタバコなどです。ただ、ゴルフだけは、とことんのめり込みそうな気がしたため、なぜか手を出そうと思いませんでした。

現在84歳ですが体調もよく、まだまだ健康で元気です。科学機器業界で一番の年上と言われるくらいまで長生きをするのではないかと考えています。（笑）

休日は、気が向いたときに好きな油絵も描いていますが、私は「シンガポールの蝉」と同じで、一年中鳴き続けておりますので、今の趣味といえばやはり「仕事」ですね。（大笑）



谷尾社長（左）と谷尾副社長（右）



会社外観（文京区後楽園）